

## 藤原宮第27—7次の調査

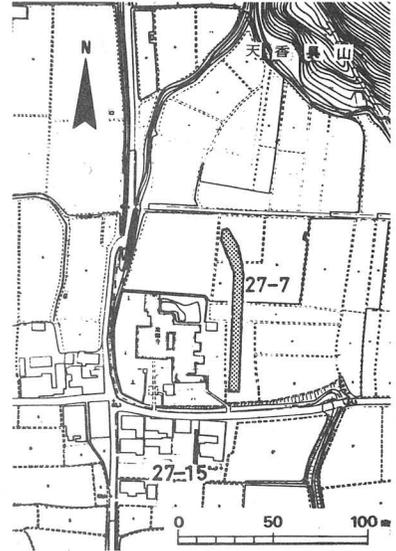
(昭和54年5月～昭和54年6月)

橿原市出合から明日香村へ至る市道（R 165号—小山線）は、昭和51年以降北から順次拡張されてきた。今年度は、小山の集落を迂回し、法然寺の東を通るバイパスを新設する計画があり、その建設予定地で事前調査を行った。

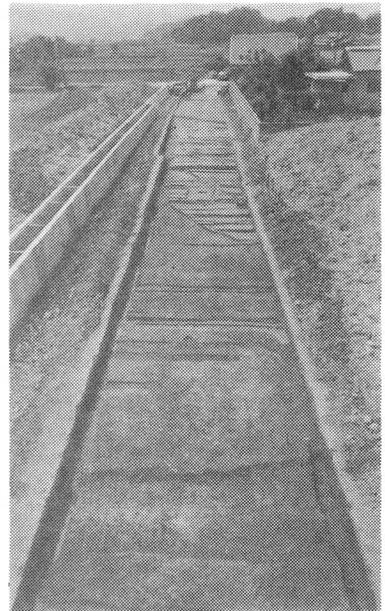
調査地は、天香久山の西南裾に位置し、周辺よりもわずかに低地である。この低地は、飛鳥地域の東丘陵に発して折れ曲りながら西北流して天香久山の西を北流する中の川の流路に当る。また、調査地は推定藤原京の条坊では、左京八条三坊の東南坪である。

調査は、完成していた道路擁壁と農業用水路にそって、その西に、東西幅5m、南北長さ約80mの調査区を設定し、実施した。水田耕土と床土は工事の一貫として除去されていた。遺構はさらに30cmの茶褐色粘土を除去したバラス層か暗茶褐色粘土層の上面で検出した。このバラス層は、後述の斜行溝よりも古い時期に形成された堆積層で、調査区の北と南で見られた。中央では、バラス層の凹みに堆積した砂層・黄褐色粘土および暗茶褐色粘土が横切っていた。

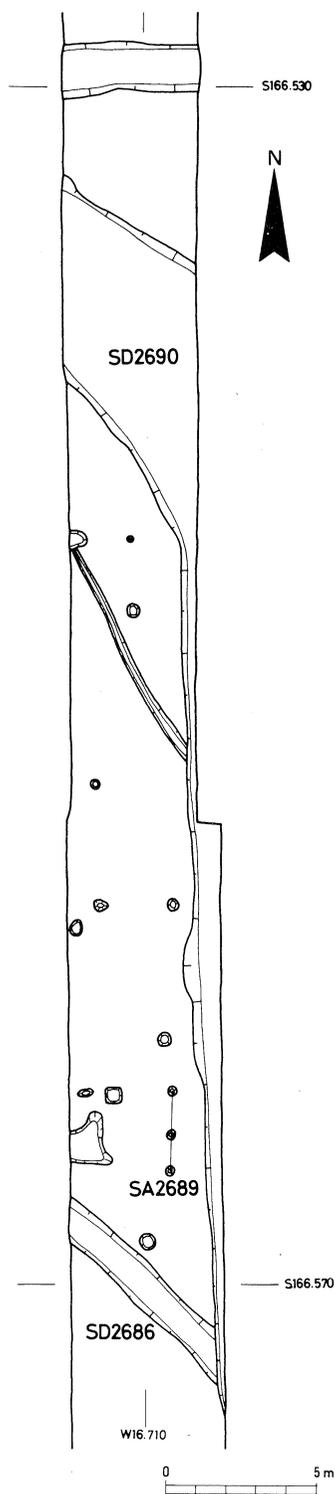
検出した主な遺構には、弥生時代の斜行溝1、7・8世紀の南北溝1、掘立柱塀1があり、ほかに、柱穴・土壇と多くの細溝がある。



調査地位置図（1：400）



調査地全景（北から）



第27-7次調査遺構配置図(1:250)

斜行溝SD2686は、調査区の南寄りで検出した。規模は溝幅1.2m、深さ0.2mで、地勢に従って北西に流れる。堆積土である暗褐色砂礫層からは、弥生時代後期（畿内第五様式中頃）の土器と石鏃・磨製石斧などが出土した。

南北溝SD2690は、調査区の東端を北でやや西に振れた方向に流れる溝で、調査区の中程からは大きく西方に曲がっている。埋土である炭化物を含む褐色粘土層からは、7世紀代～8世紀初め頃の土器が出土した。また、この溝の北側に広がるバラス層上面には、溝から流出したと思われる遺物が散布し、その中に円面硯1点があった。

掘立柱塀SA2689は、斜行溝の北で検出した南北2間（2.7m）の塀で、直径30cmの小柱穴には灰褐色粘土が入っていた。時期については、南北溝SD2690の傾きに近いものの、詳細は不明である。その他、調査区中央で数個の柱穴を検出したが、いずれも建物にはまともらなかった。

今回の調査地は藤原京左京八条三坊西南坪にあたるが、藤原宮期の明確な遺構は確認できなかった。ただ、南北溝SD2690に含まれた豊富な遺物や、その北方で出土した円面硯などは、この付近に同期の遺構の存在を示すものである。また、斜行溝SD2680については、調査地の東南0.5kmに位置する大官大寺の下層で検出された弥生時代の遺構や、西北1.2kmに位置する四分遺跡と関連して、弥生時代の集落立地とその拡がりを目指す上で重要な資料を得たものと言える。